

私は1980年11月に立教大学に専任講師として着任した。それから36年、この3月末をもって退職する。着任時は博士の学位を取ったばかりで、まだ20代だったのだから遙か昔のことである。早速、複数の授業を担当し、学科内の業務も色々回ってきた。授業形式の講義の経験もほとんどなかったので私立大学は結構忙しいと思ったものである。ちなみに私は都立大学の出身で、その助手の方々は学生実験ぐらいしか担当していなかった。その後の36年間で理学部も定員増や学科の再編などがあり、1教員あたりの学生数はかなり増加している。教員の多忙さは昔より増えており、この辺りはなんとかならないかとも思う。

1980年頃は文・経・理・社・法の5学部しかなかったのが、現在は10学部、学生数約2万人と立教大学は大きく発展した。ハード面でも新しい建物が次々と建ち、古い建物は煉瓦造りの建築群を除けば、4号館と10号館（これは当時は中学校の校舎だったが）ぐらいのものである。私の研究室のある13号館も以前は4号館に囲まれたテニスコートで、理学部テニス会がよく利用していたものである。

以前は学生数も少なかったこともあり、教員と学生、学生と職員、職員と教員の間に良い意味でも悪い意味でも、家族的な雰囲気とでもいえるものがあつたように思う。あまり大きな声では言えないが、修士論文の締め切りもかなり融通を利かしてもらったこともある。最近では教務関連の各種規定も整備されてきて、学生への対応もマニュアル化されてきている。レポート提出の締め切りに遅れるなど考えられなくなった。多くの学生に公平に対応するという観点からも、いろいろな学生からのいろいろな要望に対処する（教務委員などを経験すると学生がかなり無理な要求をしてくるということもよくわかる）必要があるということからも、このようなマニュアル化は理解できるのだが、学生の利益を優先する（流行りの言葉で言えば「学生ファースト」でしょうか）という視点は常に持っていてもらいたい。

さて振り返ってみると私も全カリとは結構関わっている。全カリ総合には、学部選出の委員として参加したことがあり、また2004年度には特別教務委員として「多彩な科目」（立教科目の前身）の検討に参加している。また2014年度から2年間、全カリ副部長を勤めさせていただいた。

学部選出の委員として、全カリ総合にかかわったころは全学部から運営委員が出ており、全カリは全学部で担うという全カリ発足当時の理念がかなり強く残っている時期であった。ほぼ毎週会議があつたが、夜遅くまで議論を行なっていたものである。特別教務委員では文学部の荒野泰典先生、社会学部の金子啓一先生、同じく社会学部の高木恒一先生とともに総合Aの見直しを行い、コア科目のカテゴリとして「人間の探究」、「社

会への視点」、「芸術・文化への招待」、「心身への着目」、「自然の理解」の5つ、多彩な科目のテーマとして「人権」、「大学」、「宗教」、「都市」、「環境」、「平和」、「いのち」、「ウェルネス」を展開することを提案した。その後、数回のカリキュラム変更が行われているが、基本的にはこの委員会の構想が受け継がれていると自負している。この委員会では総合Cとして学生の自主企画や、起業講座、学内で行われている講演会を単位化するなどの提案も出たのであるが、実際にどこがどう単位として認めるのかという点が難しく実現はしなかった。今から見ても魅力的なものではなかったかと少し残念である。

現在の総合運営チームはチームリーダーのもと5人の少数精鋭メンバーでの運営となっている。一般の教員から見ると、全カリで行われていることが少々見えにくくなったという感想を2013年に再度総合チームメンバーになった時に書いたような気がするが、それが解決しているとは言いがたいようである。2016年度からは全カリではなくて全学共通科目として各学部のカリキュラムの中で展開されている。もう一度、立教大学の全教員で担う全学共通科目という理念を全教員に思い起こしてほしいものである。

こいずみ てつお